

# 結婚活動の男女のやりとりから見た 釣り合い配偶者選択

ロジナ ナターリヤ

## 1 はじめに

近年、ブームとなった結婚活動、略して婚活は、自分磨きをはじめ、積極的に結婚相手を探す行動を示す言葉である。しかしこの言葉が出現する前から男女がお互いに選び合い、配偶者を選択していたと思われる。未婚男女が配偶者を選択する過程では、初めて出合い、相互作用し、お互いの関係を作り上げていく。

まず、最初の段階では、顕在的な属性（容姿、身だしなみ、服装、話し方、話題、しぐさ、態度）が刺激になって牽引される。牽引は二人の間の相互作用の強さと頻度によって、更に高まる。次の段階では相互作用を繰り返す中で、互いに相手の潜在的属性（性格、関心、価値観、結婚観、人生観、将来性）を知っていく段階である。顕在的ならびに潜在的属性が互いに価値づけの高いものであれば、初期の牽引は持続し、いっそう高まっていく。その逆であれば、初期の牽引は弱まり、二人は疎遠な状態になっていく。

相互作用の中では有資格者の判定が行われ、発展的移行があれば、相手が意味ある他者に変わっていく。それが好意的な反応は発展的段階への移行を助長すると考えられる（野々山、2001）。

もちろん配偶者は個人の意志で自由に選択できると考えられるが、実際には、配偶者選択は社会文化的に規定される。適格者の範囲は、社会や文化によってあるいは時代によって、ある時は広くある時は狭く限定される。特性を相手にだけ求めても、それが自分の性格特性とどのように関連するかも考えねばならない。自己及び相手のパーソナリティについての理解を深めるとともに、社会文化的背景も検討され、二人の適合性が確かめられ、適格性の検討が行われる（森岡、1974）。多数の結婚適格者の範囲の中から、候補者が次第に絞られ、最後に特定の一人が配偶者として選択される（山根、1977）。

本稿では見合いの場で会話を交わし、お互い知っていく過程を通して現代の未婚男女の社会的現実を覗きたい。言葉の交換や情報伝達のみならず、結婚相手を求めて活動を行う未婚男女の言語的なやりとりを社会的行為として知見を得られると考えられる。

リアルタイムの会話によって検討を加え、本稿のテーマに取り組むに当たって、適切な研究手法と考えられる。結婚という目標を達成するために展開される異性交際は、どのような過程をたどり、その実態を会話といった言語のやりとりから見ていきたい。男女の自己表現がみてとれることが、ひとつの重要な手掛かりになるであろう。この問題は見合いにおける男女のやりとりに限定されるものではない。見合いや紹介のみならず、合コンや見合いパーティーの場面で男女のやりとりが活発に行われていることであろう。その意味で本稿の知見は、広く示唆を与えるものともなるはずである。

これまでの研究では未婚男女の結婚観や意識と行動に焦点を当てた研究（山田、2002）や結婚難の原因として就職難や雇用形態（宮本、2008）など制度的な要素など外的な視点からされている研究が数多く見られるが、男女の場面のやりとりには、あまり光が当てられてこなかった。

本稿はコミュニケーション的な特質を解明しようとする試みであり、得た知見をまとめ、それを元に男性が求めるものと女性が求めるもの、釣り合い意識を見ていきたい。

釣り合いとは自分と見合った相手のことを意味しており、見合い結婚が主流だった時代には家柄、家業といった社会的地位の釣り合いが重視（森岡、1976）されて結婚へのマッチングが試みられていたが、恋愛結婚至上主義の今の時代では当事者同士の性格、健康、人間としての内面的要素（森岡、1974）婚前の愛情、知性や関心・趣味などの心理的特性（山根、1977）、情緒性が重視されるが、釣り合いという意識がまだ温存されていると考えられる。なぜならば結婚相手を求め、活動するとは就職活動で労働市場に参入する求職者が予め一定の留保賃金を持ち、雇用主によってそれ以上の賃金が提示されるまで求職活動を行うように結婚候補者が予め結婚相手の属性に関する留保条件を持ち、それ以上の条件を持つ相手が現れるまで相手探し活動を行うと仮定されている（加藤、2004）。

また渡辺氏によると、若者が自分の条件と釣り合う結婚相手を探し出す

プロセスを重視する。容姿、性格、性的魅力、価値観、家族構成、学歴、職業など、若者が結婚相手に求める特性は、労働市場に提供される仕事の特性と同じく多種多様であり、それらの分布にはばらつきや偏りがある。また結婚相手の候補に関する情報は不完全なので、相手探しには様々なコストがかかる。コスト、希望条件、受諾条件を考慮しつつ結婚相手を探す、不完全情報下での結婚相手の探索は本質的に不確実なものである（渡辺、2004）。

全国の意識調査結果によると、女性では相手の経済力と職業を重視する人が多く、男性では容姿と共通の趣味など重視しており、学歴と経済力にはそれほどこだわらない（国立社会保障・人口問題研究所、2002）。しかし最近の研究では男性の雇用不安定などの理由から女性は経済力を持つべきだと言われるようになってきている（山田、2010）。

## 対象と方法

著者は未婚男女を対象としたインタビューを行っていることから日常的に行動を共にし、随時ボランティアとして紹介役を引き受け、男女の紹介を行うことがあった。その中では、男女のやりとり、配偶者選択の現場で会話分析をしたい意思を伝え、両方の承諾を得た上で、録音をした。

本稿では文字化した会話を分析していくこととする。なお、以下のデータにおける、Mは男性であり、Fは女性である。男性は40代前半の者であり、女性は30代後半の者である。二人とも未婚者であり、結婚願望を有する。これまで結婚相手を探し求め、活動してきた経歴を持つ。見合いといった形式より知人による紹介といった形になろう。

現代社会において愛情を土台とする個人主義的選択が重視されるため、見合いや紹介は単に交際のきっかけを作るだけであり、その後は当事者の判断や、愛情の芽生えに任せるものであり（森岡、1976）、選択の機能が加わっている（森岡、1977）。

## II 会話から見た男女間のやりとり

### 2.1 自己紹介・共通点の発見

初めて会った男女間の会話はまず自己紹介から始まる。

紹介者は初めに男性を紹介し、知り合ったきっかけについて話した後、

男女間の会話が始まる。

会話は男性の発言により始まり、名字と名前の確認の後[01-07]には出身について聞く[09-15]積極的なスタンスを示す。

しかし男性自身が名乗らない、自分については語らないという流れでは普通に見られる男女間のやりとりとは異なっており、男性の発言の後で女性の発話といった形で継起的な流れとなる。これは女性に対する支配として解釈することもできよう。

男性は地域に関する共通点を見つけ出した時点で初めて自分について語る[19]。

01 M：お名前が？

02 F：はい。Aです。

03 M：Aさん？

04 F：はい。

05 M：下の名前は？

06 F：私の名前はBです。はい。

07 M：Bさん。

08 F：はい。

09 M：ご出身は広島なんですか？

10 F：いや、神戸です。

11 M：え？

12 F：神戸なんですけど、大学の関係で広島に来てて…。

13 M：神戸といってもどこなんですか？

14 F：須磨区です。

15 M：ああ、須磨区なんですか。へえ。

16 F：大きい住宅街のど真ん中だから。

17 M：須磨区といっても、北の方ですね。

18 F：そうですね。どちらかというと、やや北より。阪神高速の下より北。わりと近いです。高速乗れば、15分あれば…。

19 M：関西の方で仕事してたんで。神戸、震災の頃は転勤で神戸に行ってたんで。

20 F：ああ、じゃあ( )<sup>1</sup>

21 M：いつから広島なんですか？ 広島長いですね。

22 F：長いですね。

23 M：10年以上？ 5年くらい？

24 F：10年以上。

---

1 トランスクリプション記号に関する注記は本文末に記載してある。以下の会話文も同様。

男性と女性は過去に同じ地域を共有しており、現在も同じ地域に暮らすという点では会話が発展していく。二人の接点が設けられ、発展性が見られることは、結婚を考える女性にとっては結婚後の生活、出産や子育てのことを長い目で見てのことであろう。もし男性が同じ出身地であれば、女性は生れ育った地域に戻り、実家の近く子育て支援を得られやすいところで生活できるということでもあろう。

このように一見、当たり障りのないようなやりとりではあるが、地域という話題では男女の今後の生活も含め、意識の構造が見てとれる。

その後、男性が質問を行うというリーダー的な役割を担う。

## 2.2 条件の不一致

恋愛結婚至上主義の配偶者選択においては男女がお互いに惹かれあい、ロマンティックラブの過程に進み、最終的に恋愛結婚という目標に到達すると設定されている。しかし昨今の結婚活動のブームでは情緒性よりも希望条件が重視されており、ロマンティックラブのイデオロギーが既に解体してしまっていると言われている（開内、2010）。

ここでは男女の会話のやりとりから相手の属性などに関する質問が行われており、お互い知っていく過程であり、見合うか見合わないか判断が行われる。

まず、男性は地域の質問の次には女性の職業について聞く[25-29]。予想外の会話の展開では女性の属性は学生だったことは男性を躊躇させ、沈黙が続く[29]。その後男性が内容について質問し、女性のきめ細かい説明は自分の研究テーマのみならず自己開示であり、自己のアイデンティティを示すようなものでもあろう。この女性の情報提供的打ち明けは特別な意味合いを浴びているように思われる。しかし女性の返事の内容に関するやり取りが発生せず、学部名について質問が行われる。

25 M：まだC大学<sup>2</sup>にいるんですか？

26 F：はい。居座っています。

27 M：C大学の職員か研究員か何かですか？

28 F：ドクター、博士過程の学生です。

29 M：あっ、学生さんですか↓((2.1))何を研究されているんですか？

30 F：研究テーマは (theory of justice) (英語で説明する)「正義感」感情論なんです。正義感はどういうふうにして作られるものかというもので。これが賛否要論いろいろあって。そもそも〇さんという人の正義論というのが、人間が全員が自分の個人の状況、また社会状況があるから、どういうルールを作るのが一番理想的なルールなのかって。そもそもそういう状況があり得ないんだから、話すだけでも無駄だっていうのもあるし、話しだけはあり得るから。そもそもありとあらゆる国家って存在してもいいものっていう理解なんで、人間がそもそもそういうの二通り分かれていて。私はどちらかという、後者です。

31 M：それが学部の時から？ 教育学部の？

32 F：いや、文学部。

33 M：え？ 文学部、そういうこと研究するところがある？

34 F：D学科です。

35 M：あ、なるほど。D学か。そういうことか↓ (0.7)。学生さんで十何年も？↑

36 F：居座っています。ずっと。学部から。

37 M：そうすると、生活費とかは？

38 F：全部自分で。

39 M：全部自分で？ アルバイトか何か？

40 F：留学生のチューターと、留学生の世話をするアルバイト。今年二人引き受けているのと、あとは塾講師。学童保育もやっています。何とか。

41 M：へえ((2.9))。

---

<sup>2</sup> C大学は地方国公立大学

[35・37]男性は自分が想像していたものとは異なる様子に驚く。女性の経済的状況について聞くとは無関心ではないと解釈できる。しかし男性の思い描いていた働く女性とは異なる・不安定な立場に置かれている女性だと認識し、沈黙が発生する。[29]と[35]の中では女性の学歴、現在の生活に対する躊躇、そして会話のはじめより関心の欠如として捉えることができる。

また[41]では長い沈黙になり、男性の有意義な行為として相手に対する疎遠な行為または無関心なスタンスとして解釈することができる。沈黙の後には女性による発言で会話が再開する[42]。そしてこれまでの男性の発信は終わり、男性が女性の質問に答える流れとなる。

42 F：元々は？

43 M：元々は。

44 F：関西？

45 M：関西じゃなくて、実家はここ、E（地区）なんです。Eで育って、仕事の都合で転勤で神戸、関西で6年間で、こっち戻ってきて。

46 F：なるほど(( ))こっちの方がどうしても長いですね。

47 M：え？

48 F：関西にいるよりは。

49 M：中高の友達はこっちなんです。関西の友達は関西なんです。

50 F：ああ。↓ん？ 中学校や高校はずっとここで、就職するということ  
で、もう関西という形？

51 M：大学は地元のG大学<sup>3</sup>だったんで。

52 F：ああ、そうだったんですか↓

53 M：ほとんど広島で。広島で就職したんですけど、全国で支店のある会社だったんで、関西へ。

54 F：ずっとHさん<sup>4</sup>で？↑

55 M：Hではなくて…住宅計画なんです。だからずっと広島。

56 F：ああ↓((0.2))

---

<sup>3</sup> 同じ地域の私立大学

<sup>4</sup> 大手保険会社のことを想定

男性は自分の出身や居住地に関する質問に答え、大学名の発言の後には女性の音調が下降する[52]。そこでは女性の本来、求める相手の学歴のみならず大学名などの志向性が見られる。男性の学歴や出身大学などの条件で評価し、関心の希薄化と結婚相手として適切性はないため、除外化していると解釈できる。

そして[54]の女性の発言では具体的な会社名が出現し、女性は男性の勤務先が大手だったと思いついて描いていたことが分かる。相手の認識が遅延されていることもあり、男性が違う勤務先だったことが判明し、女性の音調が下降する[56]。女性の沈黙が続き、相手に対する関心の欠如が更に進化する。

その後の会話は男性が主導権を握り、女性の経歴について聞いていく流れとなる[57-59]。

57 M：学童保育って？

58 F：そこの I（小学校）。

59 M：海外に留学されたことは？

60 F：残念ながら。

61 M：先、英語は達者のようで。

62 F：褒めてもらえると嬉しいです。

男性も自分の勤務先や職業的な要素が相手に魅力的に見えなかったことと沈黙による関心の欠如を知覚し、自己が潜在的な結婚相手として適切性が乏しいと認識されていることを知覚する。前の話題に戻り、女性のアルバイト先について聞く姿勢を示す。質問の意図は女性の生きざまやライフスタイルを知ることとして捉えることができるので、関心の欠如として見なすことは難しいが、経歴や留学経験の有無について聞く。[62]相手の自己に対する評価を示すが、礼儀化された発言だと解釈もできる。

### 2.3 相互作用儀礼化

ここでは男女の共有する部分の確認作業が終了し、相互認識が達成された後二人は現在共有する地域の気候について話を進めていく。

これまでの会話の流れとは違い、二人が共通できる話題であり、親密性を求めるような展開ではなく、礼儀化されたやりとりとなる。

63 F：こっちはあまり積もらないですね。

64 M：こっちはあまり積もらないですね。山と比べれば。

65 F：山じゃないから。山ひどいから。

66 M：原付で市内までとかもうとんでもないです。

67 F：あれは大変です。いけるのはいけるんですけど、道路はすごい狭くて、すごい坂で、走りにくい…。

68 M：さすが。

69 F：走ってますから。原付で。

70 M：原付で？ああ！↑

[68]男性の発言「さすが」とは何かさしているわけではないので、この場面では制度化された発言であり、相互作用儀礼として礼儀化された発言に見えてしまいがちであるが、二人の会話の流れとしては天候の話題がバイクの話題に変わっていくところからは女性の生活などの自己開示でもあり、自己の存在を分かってもらうための女性なりの努力でもあろう。

71 F：最初は、乗って1年2年は危険かなと思って遠慮してたんですけど、大分慣れたので、そろそろいいだろうと。ホンダのカブ。あれは走るんで。そろそろ実験を。ざーっと。天気さえよければ。冬場やらないです。さすがに怖いので。夜とは凍ってるんでしょう。

72 M：カブではよく乗れるな。怖くて乗れない↑

73 F：いやいや、その怖い時期は乗らないから。凍ってなければ、何とかなる。雪さえ積もってなければ。あれもグリップヒーターを付けますから。別料金で。これくらい絶対有利!! あれは今年付けました。ガラス付けようと思ってたんですけど、割れやすいと聞いたんで、やめた。

74 M：((0.4))

75 F：雨は大変ですけど、雪はもっと大変ですよ。凍ったら危ない。夜とかは運転危なくないですか？

76 M：あのう、凍結してない限りはそうでもないけど。

77 F：ああ。

78 M：スタッドレスタイヤ、そういうものはあると、安心かな。

79 F：そういうものをはいてれば。

相手の行動や生活習慣は自分にはできないようなこととして除外化する発言[72]である。

男性の発言に対し、話しつづけた女性は男性の生活習慣に関する質問を行う[81]。相手の前の発言[80]に対する発話だったとも言えるため、関心を示すような行為として見なしにくいであろう。しかしその発話の継起として男性が女性に対して質問を行う[83]。[83]外国の経験について質問する。これは[59・60]で既に話題として出ているが、その継続化として浮き上がる。男性の外国に関する質問とは生活感や金銭感覚について問うと捉えることもできると同時に相手の生活様式から彼女の生きざまや雇用形態から伺える経済状況からライフスタイルを示す情報から人格を思い描いていることとしても捉えることも可能であろう。

80 M：結構いますね、人は（カフェを見渡す）。昼はわりと閑散してますけど。

81 F：大学から近いから。よく来ちゃってですか？ ここには？

82 M：ここ、たまに昼に話しできる場所はここしかないから。ここかスーパーのフードコーナーとかですかね。

83 M：外国に行かれたこととか、留学したことはないんですね？

84 F：留学はないですね。

85 M：行ったことはある？

86 F：一応はあるんですけど。研修みたいなもので、語学研修には全然ならないのと、昔から日本語以外は問題にならないのは英語だったんですけど。英語圏じゃないですよ。アンデルセンの研修で。パン屋さんやってます、バイトで。

87 F：ええ。なるほど。タカキベーカリさん。

88 M：タカキベーカリ。設立の記念にバイトで3年以上働いてれば、お祝いに8万円で往復というプランあったんで。8万円でデンマーク行けるなんてまずないですよ。だったら行こうと思って。

89 M：8万？ それは安いですね。

- 90 F：安い。それは会社がバックアップしてるからというのがありますので。
- 91 M：安いね。タカキベーカリさんは三宮にもあったような。今あるかは分らないんですけど、当時はあったような。
- 92 F：三宮は間違いなくあると思います。

[86]では女性の留学経験に関する質問に対する受け答えでは、「研修みたいなもので」とは具現化する発言であり、自分の教養レベルを相手に合わせようとする部分がある。男性の教育レベルに見合っていない者ではないという意思表示としても捉えることができる。

[89・91]では費用の安価に関する点からして女性の消費行動は自分の中の許容範囲内であると解釈できる。また男性の発言では二回「安い」という言葉が聞き取れるため、共感する姿勢を見てとれる。そしてやりとりが中断せず地域と関連付け、発話が続くとは男性の親密さを示す行為として解釈できよう。

- 93 M：でも、広島出身だから（タカキベーカリ）中四国にありますかね。
- 94 F：リトルマーメイドはオーナー店という形で、フランチャイズの形でやってるんで。
- 95 M：おお。そうなんだ。
- 96 F：オーナー店とフランチャイズ店とか4グループくらい。グループ化されてるんで。J（地区）のあそこかは。
- 97 M：今も続いている、そこ？
- 98 F：やっています。
- 99 M：Jのあそこは？
- 100 F：レジで。
- 101 M：ああ、レジ。
- 102 F：いらっしゃいませーと言って、パンを焼きあがったものから並べて、合間を縫ってパンをスライスしたり、後はお客さんの注文を聞いて、商品を案内したり。典型的なレジです。
- 103 M：どこの？
- 104 F：Jのサービスエリアです。
- 105 M：サービスエリア行ってるんですか？

106 F：はい。

107 M：はは。

107 F：土日を中心に。お盆はかなり。前は自転車で通ってたんですけど。  
バイク買ったから大丈夫なんだけど。

地域に関するやりとりが続く中では、地域性が緩衝措置として機能している。そこから発展する会話の中では女性の発言[107]では移動手段に対する男性の評価がステレオタイプ化した「らしさ」として否定される[108]。

108 M：なんでまたカブ買ったんですか？ 女性、あまりカブ買わないしね、普通に。

109 F：あれはいいですよ。新車で買ったんですけど、お得で、買い物にも便利で。後ろにはなんぼでも詰めるので。工夫すれば。あれはよかったです。

110 M：確かにね。(笑う)

111 F：だから、あれにしたんで。

112 M：(携帯電話が鳴る) 呼び出しがかかったので…。

[108]男性の「女性らしい」感覚とは異なる行動様式として捉え、[111]では否定はするような姿勢は示さず、これ以上質問などせず、[112]の発言で疎遠な行動に出る。

ここでは会話が修了し、男女は二度と会えぬ仲となる。

### III まとめに代えて

以上、これまで二人の男女の会話から配偶者選択の相互行為を見てきた。限られた時間の中でこの言語的なやりとりは相互作用として展開していく中、男女間の発話から相手に求める条件化、適切性の判断が行われる。社会的地位などの条件といった外的要素のみならず、内面的要素なども重視される。

相手の属性が外的な要素として条件を受け入れることのできないことから内面的な要素を知ることには至らない。相手の属性は婚活者の希望条件には合わないため、発展的移行が困難となる。男女双方には好意的な反応

が見られない。

これまでの研究ではロマンティックラブが婚活の場では解体していると指摘されており、情緒性よりも条件が優先されるが、しかし本稿で取り上げた二人の男女ではそれと同時に自己開示や相手のことに関する質問も行われており、趣味や関心事からは情緒性の傾向もみられており、条件化と相俟っている部分がある。

彼らの交渉からは条件といったものが社会構造のあり様を示唆している部分があり、これは釣り合いといった意識が温存されているとも言えるかもしれない。

ここでは男性が零細保険代理店の自営業に従事する者としては稼働力があまり期待できないが、彼は老親を抱えており、唯一な稼ぎ柱としては一家を支えていくには困難を感じており、潜在的な結婚相手の女性にはまず働いてもらうことを求めている。会話の中でも男性は相手に経済力を求めている部分が見てとれる。アルバイトでも構わないような発言も見られ、女性の消費行動に関する質問するなど金銭感覚の類似した相手を求める。これは結婚生活における家庭の運営も見込んでのことであろう。女性の出産年齢などを見据え、一般的に男性は自分より年下の女性を好むという傾向（山田、1996）の指摘もあるが、学歴や年収などの点では下を望む傾向があると言われている。留学経験や海外旅行の経験について質問をする男性はここでは自分より人生経験豊かな女性を敬遠すると捉えることもできるかもしれない。学歴に関しても地域で学校名でないと質問で確認するなど、自分とは異なる学力の女性とは関係構築が難しいと考えていると解釈できる。

会話では男性が主導権を握っており、女性はトピック選択ができないところからは男性の服従させたい欲求が見てとれる。女性は支配される存在になってしまいがちである。逆に男性が自己について語らず、自己開示が見られない。男性の発言の乏しさが自己開示の努力の無さのみならず、自己のアイデンティティ、存在が否定され、結婚相手として敬遠または排除されることを恐れ、発言に躊躇するとも捉えることができるかも知れない。

女性の発言からは相手の学歴や勤務先に関する質問が見られる。大手企業の社員だと思い込んでいたため、異なることが判明し、それ以降は聞くスタンスを示さない。男性から聞かれたことに対し返すのみの行為をとる。

地域を共有していたことについてのトピックでは、結婚生活を思い描いてこととして捉えることもできるので、女性の結婚や出産の意識を伺える。

本来、二人の会話構造は応答的行為となっており、発話の継続を促進するやりとりは最初の時だけである。この相互作用から女性が相手と親密になる意思がないと判断できる。

本稿では二人の男女が初対面で会話により相互作用し、評価され合い、結婚相手に求める条件の不一致のため、後々の相互作用が成立しないことを見てきた。二人の男女が初対面で会話により相互作用し、評価され合い、結婚相手に求める条件の不一致のため、後々の相互作用の展開がなく、発展的移行が困難と考えられる。双方には好意的な反応が見られないため、交際が成立しないことを見てきた。この事例では十分には配偶者選択を語るのに制約があろうが、結婚活動を考える際に一つの手掛かりになったかと考え得る。

結婚を望んでいる男女でも条件が合わなければ結婚を前提として交際は困難である。結婚願望を有するが、結婚活動をしてもなかなか結婚難が解消されることはない。

男女間の会話分析は妙なやりとりが見られるので、研究の意義は大いにあると考えられる。一つの発言には二重の側面があるので、より細やかな考察が可能であり、メリットがあると考えられる。発言には条件のみならず、個人のパーソナリティに関わるような部分があり、両方の要素がある。

紙にも制限があるため、一つだけの事例となったが、今後は相互作用が成立し、交際にいたるような男女間のやりとりに注目した研究は今後の課題としたい。

#### トランスクリプション記号の表記

↑ : 直後で音調が際立って上昇している

↓ : 直後で音調が際立って下降している

((数字)) : 0.1秒単位で推測した沈黙の長さ

(. ) : 0.2秒未満の短い沈黙

( ) : 分析者による注記

## 参考文献

- ・加藤彰彦「配偶者選択と結婚」『現代家族の構造と変容 全国家族調査による計量分析』東京大学出版会、p.41-57、2004
- ・串田秀也『相互行為秩序と会話分析』世界思想社、2006
- ・谷富夫・芦田徹郎『よくわかる質的社会調査 技法編』ミネルヴァ書房、2009
- ・戸江哲理「テレビ人生相談における相談 助言の相互行為的達成 成員カテゴリー化分析を中心に」マス・コミュニケーション研究 (70)、p.139-156、2007
- ・戸江哲理「乳幼児をもつ母親同士の関係性のやりくり 子育て支援サークルにおける会話の分析から」フォーラム現代社会学 関西社会学会 8号、p.120-134、2009
- ・戸江哲理『乳幼児をもつ母親の悩みの分かち合いと「先輩ママ」のアドバイス ある「つどいの広場」の会話分析』子供社会研究 日本子ども社会学会紀要14号、p.59-74、2008
- ・開内文乃「婚活ブームの二つの波 ロマンティックラブの終焉」『婚活減少の社会学』東洋経済新報社、2010
- ・前田泰樹・水川喜文・岡田光弘『エスノメソドロジー 人びとの実践から学ぶ』新曜社、2007
- ・宮本みちこ等『地域における若者育成及び家族形成 支援に関する調査〈西日本編〉』こども未来財団、2008
- ・望月崇「配偶者選択と結婚」『社会学講座 家族社会学』森岡清美編 東京大学出版会、1977
- ・森岡清美「新・家族関係学」『配偶者選択の原理』中教出版、1974
- ・森岡清美・山根常男『家族と現代家族』培風館、1976
- ・森岡清美『現代家族のライフサイクル』培風館、1977
- ・野々山久也・清水浩昭『家族社会学の分析視覚』ミネルヴァ書房、2001
- ・山崎敬一『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣、2004
- ・山崎敬一『美貌の陥穽 セクシュアリティのエスノメソドロジー』ハーベスト社、2003
- ・好井裕明『批判的エスノメソドロジーの語り差別の日常を読み解く』新曜社、1999
- ・山田昌弘『結婚の社会学・未婚化・晩婚化はつづくのか』丸善、1996
- ・山田昌弘『若者の将来設計における「子育てリスク」意識研究』厚生労働科学研究費補助金調査報告書、2002
- ・山田昌弘『婚活現象の社会学』東洋経済新報社、2010
- ・山根常男・森岡清美『テキストブック社会学(Ⅱ) 家族』有斐閣ブックス、1977
- ・渡辺秀樹・稲葉昭英『現代家族の構造とヘニョウ』全国家族調査による計量分析 東京大学出版会、2004
- ・国立社会保障人口問題研究所『結婚と出産に関する全国調査』第12回出生動向基本調査 独身者調査、2002